

義務教育学校のメリットとデメリット

●義務教育学校のメリット

義務教育学校のメリットには、中 1 の壁の緩和・解消、系統性を意識した小中一貫教育、異学年交流による精神的な発達などが挙げられます。

義務教育学校の教育の特例

通常の小学校と中学校では、各学年の 1 年間で学ぶべき内容・時間数が法律によって定められています。全国のどこで生活をしている子どもたちでも、同じ内容・同じ基準での「学びを保証」するためです。義務教育学校は 9 年間を一つの「学びの場」と考えるため、指導内容や基準は変えることはできませんが、子どもたちの実態や理解の程度、9 年間の指導内容の系統性を考えて、指導する時期（学年）や指導時数を柔軟に考えることを可能とする「特例」が認められています。

学年段階の区切りを 6－3 年以外に柔軟にできる

現在の学校制度では、学年段階の大きな区切りは必然的に小学校と中学校の「6－3」になります。しかし、義務教育学校ができたことにより、9 年間の中で独自の大きな区切りを設けて子どもたちの発達段階に応じて、効果的な教育課程を組み児童生徒の指導を行うことが可能となりました。「4－3－2」や「5－4」など様々な区切りが考えられ、平成 27 年度段階では、学年段階の区切りを「4－3－2」としている学校が 57%と半数以上で最も多く、「6－3」が 18%となっています。

系統性・連続性を意識した小中一貫教育

小中一貫教育では系統的・継続的な学習によって教育効果が高まることが期待されます。特に校舎一体型の義務教育学校では、教科内や教科間の学習内容の関連性を意識して指導順序や指導内容を考えたり、児童生徒にとって理解が難しく、つまづきやすい内容は定められた学年以外でも繰り返し指導したり、関連性の高い内容については前の学年で時間を割いて重点的に丁寧な指導をするなどの工夫が可能となります。

中 1 の壁・小中ギャップの緩和・解消

義務教育学校のメリットの 1 つとして、中 1 の壁・小中ギャップの緩和・解消が挙げられます。小学校と中学校では学習環境、生活環境、人間関係などが大きく変化するため、生徒が変化に対応しきれない中 1 の壁、小中ギャップという問題があります。

小学校と中学校を 1 つの学校にした義務教育学校では、小学校と中学校の間の段差を緩和することができ、小学校教育から中学校教育への円滑な移行を促すことが可能となり、中 1 の壁や小中ギャップと呼ばれる問題が緩和・解消する効果が期待されます。

異学年交流による精神的な発達

義務教育学校（特に施設一体型）では小学 1 年から中学 3 年に相当する生徒（1 年生から 9 年生）が同じ学校で学びます。施設一体型以外の施設隣接型や施設分離型では物理的な距離は離れますが、何らかの交流の機会が持たれます。

1 年生から 9 年生までの生徒が学校行事などを通じて異学年交流を行うことによって、上級生から下級生に対する思いやりの心、上級生・下級生の規範意識、下級生から上級生に対する憧れの気持ちなどの醸成が期待されます。異学年交流によって精神的な発達や社会性の育成の効果が期待されます。

継続的な生徒に対する指導

義務教育学校は小学校と中学校が 1 つの学校となり、9 年間継続して生徒に対する指導が行われます。そのため教員間で生徒の情報を共有しやすく、生徒指導を効果的に行うことができるようになります。

生徒の個性に応じたきめ細やかな丁寧な生徒指導が可能となります。

●義務教育学校のデメリット

義務教育学校のデメリットとして、中高一貫教育との整合性が取れない、リーダーシップや自主性を養う機会が減る（小学校高学年の時期）、9 年間で人間関係が固定化しやすい、などがあります。

小学校卒業の達成感がない

義務教育学校の場合には小学校と中学校が 1 つの学校になるため、小学校卒業の達成感がなくなります。前期課程修了になるため修了式を行うことで卒業式を代替する場合がありますが、学校が変わる卒業式と単に 6 年生から 7 年生に学年が上がる修了式では達成感に差が出ます。子どもにとって 1 つの区切りを超えた、成長したと実感できる機会が減ってしまうのです。

中学校の新鮮さがない

義務教育学校は、小学校と中学校の段差をなくし、中 1 の壁や小中ギャップと呼ばれる状況を解消することなどを目的としていますが、段差をなくして 1 つの学校にしてしまう結果、中学校の新鮮さがなくなります。

新しい学校に通うことで、やる気が出てきたり、心機一転したり、人間関係が大きく変わったりしますが、新鮮さがなくなり、変化するきっかけの 1 つが失われてしまうのです。

小1と中3は差があり交流に課題がある

義務教育学校では小学1年生（1年生）から中学3年生（9年生）に相当する生徒が在籍し、学校行事など様々な学校の活動を通じて異学年の交流や学年の縦割り活動などが行われます。しかし、小1のような低学年と中3のような高学年では発達段階に差があるため配慮が必要となります。

中学生相当の生徒の悪影響の恐れ

一般的に中学生の段階になると、精神的に発達し、思春期・第二次反抗期に当たる時期となるため、不登校やいじめ、暴力事件などの問題が増えやすくなる可能性がある。そのため、中学生相当の生徒の行動や振る舞いが小学生相当の生徒の発達に悪影響を及ぼす恐れがあり、学校側の教育上の配慮が重要となります。

⇒近隣の先進校を見ると、中学生にあたる学年の生徒は逆に優しくなり、下の子の面倒をよくみる傾向があります。

リーダーシップや自主性を養う機会が減る

学校集団の中で高学年となると、学校行事などにおいて重要な立場となるため、リーダーシップや自主性が養われます。小学校であれば高学年の5年生や6年生、中学校であれば3年生の時期が該当します。

しかし、義務教育学校では小学校と中学校を1つにしまうため、小学校段階の5年生や6年生は高学年ではなくなり中学年となってしまう、リーダーシップや自主性を養う機会が減ってしまうのです。

⇒近隣の先進校では、運動会などの学校行事において中学生ではなく5・6年生を主体に運営することでそれぞれの発達段階でリーダーシップを発揮する機会が出てきます。

人間関係が9年間固定化しやすい

義務教育学校はクラス替えはあるにしても、9年間同じ生徒の構成で過ごすことになります。9年間同じ学校で生活を送ると、人間関係が固定しやすいため、一度からかいの対象となる、弱い立場に追い込まれる、仲間はずれになるとその状況がずっと固定化してしまい、立ち直る機会が得られない場合があります。

休み時間に低学年の生徒が委縮する可能性

義務教育学校では、休み時間に運動場などの施設で遊ぶ場合、低学年の生徒と高学年の生徒と一緒に遊ぶと身体能力の差によって危険が生じる場合がある（小学校段階低学年と中学校段階の生徒は大きく異なる）ほか、低学年の生徒が遠慮・委縮して遊べない恐れもあります。

⇒近隣先進校の事例を見ると、低学年の児童が委縮してしまうということは見られず、伸び伸びと笑顔で遊ぶ姿が見られます。

●まとめ

- ・義務教育学校とは、小学校の 6 年間と中学校の 3 年間の義務教育期間の合計 9 年間を 1 つの学校として、一貫の教育を実施するための学校で、9 年間の系統的な教育、継続的な生徒指導、異学年交流などが特徴です。
- ・義務教育学校のメリットには、中 1 の壁の緩和・解消、系統性を意識した小中一貫教育、異学年交流による精神的な発達などが挙げられます。デメリットには、中学校の新鮮さが無い、人間関係が固定化しやすい、などがあります。